長野県革新懇ニュース

2018年7月号
発行日7月10日
会　費　2,000円
購読料　3,000円（送料込）
振　替　0510-3-15971

230

発　行　日本と信州の明日をひらく県民懇話会
（長野県革新懇）発行人：山口光昭　編集長：高村裕
〒380-8790　長野市県町593　高校教育会館内
TEL：026-234-1231　FAX：026-234-2219　ﾒｰﾙ：mail@nagano-kakushinkon.com

＝＝＝＝＝今号の主な記事＝＝＝＝＝

1面　田島隆さんインタビュー
2面　1面続き、近現代信州の歴史回廊
3面　怒りの県民集会に2000人
「沖縄連帯のつどい」開催、読者の声
4面　「余命」について　窪島誠一郎さん
本の紹介『島崎藤村『破戒』のモデル大江磯吉とその時代』
漢字パズル

長野県革新懇　検　索

1939年、長野市川中島町生まれ。57年、信州大学教育学部入学。58年、中国文学研究会に加入、魯迅、ロマン・ロランを読む。60年、教育学部学生委員長、60年安保闘争を闘う。同年、魯迅の著作からケーテ・コルヴィッツを知る。61年より小・中学校教師として県下の公立学校に勤務。86年、長野市で上野誠木版画展開催。97年、長野県教職員組合執行委員。99年、退職。同年、上野誠版画館をつくる会発足。2001年、ひとミュージアム上野誠版画館開設。

反戦の志を引き継ぎ 美術館の運営にあたる

田島 隆（たじま たかし）さん

（ひとミュージアム上野誠版画館・館長）

同郷の反戦版画家 その存在に驚き

Q　はじめに、上野誠に関心をもたれるようになったきっかけをお聞かせ下さい。

そもそもは1962年に『文化評論』という雑誌に上野のグラビアが載ったことがきっかけです。それは「焼けた五重塔」だったんですが、それを観て非常にビックリしました。五重塔の版画は幾らでもあるけれど、焼けた五重塔の画は観たことなかったので、これは珍しい作家だと思って注目したわけです。その後、上野誠という名前がぽつぽつと目につきましたが、当時は、それほど上野に強い思いがあったわけではありません。

その後、望月の学校に勤務していた頃、佐久の油井正次さんという人と知り合いになったんですが、あるとき臼田の農民会館で油井さんが上野の版画を周りに見せていたんです。農民運動家の油井さんということしか知らなかった私は驚いたのですが、油井さんは上野と一緒に「版画運動協会」というグループのメンバーだったことを後で知りました。

2番目は、長野大通りができたとき、通り沿いに「せせらぎ画廊」というギャラリーができたんです。たまたま興味があって訪ねたところ、なんと「上野誠全版画集」があったんです。中を広げて経歴を見たら出身地が更級郡川中島村大字今里字阿弥陀堂と書いてあって、これまたビックリしました。まさか原爆を描く人が同じ村出身だなんて夢にも思わなかった。

そこで画集にあった住所に電話をかけたところ、息子さんが出ました。自己紹介をし上野との縁なども話しながら、展覧会のことを尋ねたところ、被爆地の長崎をはじめ全国各地で開いてきたことが分かったのですが、どういうわけか長野ではないとのことでした。

それなら長野で上野の展覧会をやろうということで、いろいろな人と相談して遺作展をやることになりました。1986年のことです。戦前の作品はロートレック画廊で、戦後の作品は新築間もない県教育会館で展示しました。それが長野での上野の作品展の最初です。その時に、ロートレック画廊の山口高治郎さんをはじめ、窪島誠一郎さんや小崎軍司さんなど何人かの美術関係の人と知り合うことになりました。

常に弱者の立場で 生き方を貫く

Q　上野誠の生涯と作品についてお話し下さい。

上野は1909（明治42）年に、ここから1・5キロ位ほど離れた川中島町今里という所で生まれました。家は代々鍼灸師で、姓は内村です。内村家は名家で、先祖は江戸時代に民衆のために命を懸けて闘ってきた歴史があるんですね。それが親から子どもへと伝えられてきて、内村誠も小さい時から弱い者の味方になれと繰り返し言われ、自分もそう思っていたようです。彼はその生き方をほぼ一生貫いたと私は思っています。

長野中学に進学し、山本俊治という絵の先生に見いだされて、美術学校へ行くように勧められ、1931年に美術学校（現在の東京芸大）に入りました。そこで行き会った築比地正司さんたちの影響で左翼運動に関わるようになります。2年の時に学内民主化運動に関わって、退学になりますが、その前に警察に捕まりひどい拷問を受けます。

このときの獄中の様子については興味深い逸話があります。留置場には強盗やスリなどが入っていましたが、拷問から帰ってきて自白しなかったことを話すと大変感心して、トイレの介助などもしてくれたそうです。房内には著名な演出家になる千田是也や美校仲間の築比地さんがいて、掌に文字を書いてお互いに連絡をとり、励まし合っていたとのことです。

出所して川中島へ帰りましたが、保護観察ということで月に1回、警察に行かなければなりませんでした。その頃、須坂に小林朝治という眼科医がいて、彼がパトロンになり版画グループが活動していました。そこに平塚運一が来て版画を教えていたので、上野もそこへ通って版画の技術を身につけました。その後、東京に出て、美校の同級会に出たところ、内村の身の上を心配した担任の先生が教員の検定制度を教えてくれ、それに合格して、美術の教員になることができました。ただし前歴を隠せと言われていたので、姓を内村から奥さんの上野に変えたようです。

その後、長野中学時代の恩師が上野に後釜をやるよう勧めてくれ、鹿児島県の指宿の中学の先生になりました。指宿に行って教え子に当時の話を聞いてきましたが、そこでは、生徒に非常に慕われていたようです。たとえば、当時は知覧飛行場が特攻隊の基地で、学生は飛行場の整備を1ヶ月ぐらいやらされました。先生たちは木の陰にいて子ども達にあれやれこれやれと命令しているだけなのに、上野だけは上半身裸になって毎日子どもと一緒にもっこ担ぎをしていたとのことです。その後、長野中学の恩師の引きで岐阜の青年学校に移りました。そこでは病気になる子どもが続出するので、上野は上司から病状を確認してくるように言われましたが、どの家も百姓で非常に困っていて、子どもの人手がないと農作業もできないとの話を懇々と訴えられたので、子どもは誰も治っていないとレポートを出したとのことです。また、その当時には反戦の絵を描いていて、同僚から危険だから止めるよう言われていたようです。その絵はいま神奈川の近代美術館にあります。

そして、敗戦になりました。上野は反戦主義者ではあったけれど、そのことを子どもに伝えることができず、出征する子どもを万歳で送り出してきたという自責の念から、もう教員は続けられないと考え、新潟で玩具のデザイナーになり6年間ほど仕事をしていました。その後、再び東京に戻りましたが、奥さんが腕のいい美容師だったので、生活は任せ、上野は死ぬまで絵を描いていました。

最初は戦争反対の絵を描いていたんですが、1954年の水爆実験と第五福竜丸の被爆が転機となり、上野は原爆被害をテーマに「ケロイド症者の原水爆禁止の訴え」を描きました。上野と被爆者との最初の関わりは、火傷やケロイドを描くことだったのです。少し後に描かれた「ヒロシマ三部作」はライプチヒ国際書籍版画展で金賞を受けるなど、高い評価を受けました。

しかし、火傷だけを描いて原爆の本質が分かるのかという思いもあり、長崎へ行き被爆者に会い、今まで描いた絵を見せたんですね。それに対して一人の被爆者が語った「何べん話を聞いても同じや」という言葉に大変ショックを受けて、1ヶ月滞在して1軒ずつ被爆者の家を回り、生の声を聞くんです。そうした中で、被爆者の本当の願いが何かということがわかってくるわけです。それは、火傷だけではなく、被爆者差別であり、貧困や体調の崩れによる苦しさだということを知るわけです。そうした中で、原爆被害者の苦しみ、怒り、願いの全体像を知るわけです。そして、

【2面に続く】